

教父の聖書解釈から考える

# 原罪と女性

上智大学中世思想研究所主催講演会



2017 2/26 Sun. 13:20 - 16:50

会場：上智大学四谷キャンパス 2-410 教室（2号館4階 開場 13:00）

13:20-13:25 開会挨拶

13:25-15:30 ご講演

出村みや子（東北学院大学）

オリゲネスからアウグスティヌスへ——原罪論の生成史と女性の位置づけ

佐藤真基子（富山大学）

アウグスティヌスにおける女性の貞潔と聖性

15:45-16:45 コメント 矢内義顕（早稲田大学）

／質疑応答 司会 佐藤直子（当研究所所長）

16:45-16:50 閉会挨拶

連絡先：上智大学中世思想研究所 Tel：03-3238-3822 / E-mail：imdtght@sophia.ac.jp

画像出典 ルーカス・クラナハ（父）『アダムとイブ』（1526年）

# 教父の聖書解釈から考える 原罪と女性

## ご挨拶

人間の救いがたい弱さに直面することはしばしばありましょう。具体的な出来事を契機にこれが露呈することもあれば、如何ともしがたい傾向性として感じられることもあります。人類史上の大きな悲劇がこの「弱さ」に根差していると思われることも多々あるでしょう。しかしそうした所感が巧みに隠蔽されていることもまた事実です。人間のこうした現実、キリスト教では「創世記」第三章「楽園追放」の記述から「原罪」の名のもとに教義化されていきました。西欧のキリスト教的人間観は「原罪ありきの人間観」であったとも言えるのです。今日の状況に鑑みれば、この人間観を再構成することには大きな意義がありましょう。しかしここで、原罪の教義がセクシャリティーさらには女性の抑圧へと繋がっていったことを考えますと、「原罪論の形成」と「女性」との捻じれた関係を再検討することも不可欠の課題となってまいります。

原罪の教義形成に甚大な影響を与えたのはアウグスティヌス (Augustinus 354-430 年) であります。そして彼の思想には、オリゲネス (Origenes 185 頃 -254 年頃) の聖書解釈が流れ込んでいます。そこで今回お二人の講師をお招きし、原罪に関するオリゲネスの聖書解釈とアウグスティヌスによるその受容と展開を追い、さらに「レイプされ自死した女性」に関するアウグスティヌスの言説から彼の貞潔・聖性観に迫ります。コメンテーターのお話を交え、女性さらには性差を超え、すべての人間の本来の在り方を巡り、問題意識を深める時間をご来場の皆様と共有したく存じます。

上智大学中世思想研究所所長 佐藤 直子

## 講演者・コメンテーター：主要業績

出村みや子 (東北学院大学文学部教授) : E・ペイゲルス『アダムとエバと蛇——「楽園神話」解釈の変遷』(共訳、ヨルダン社、1993 年)、『総説キリスト教史 1 原始・古代・中世篇』(共著〔第二部古代〕日本キリスト教団出版局、2007 年)、『聖書解釈者オリゲネスとアレクサンドリア文献学——復活論争を中心として』(知泉書館、2011 年)、他。

佐藤真基子 (富山大学教養教育院教授) : 「希望の存在論——悪の深淵から希望へ」『希望に照らされて——深き淵より (2014 年上智大学神学部 夏期神学講習会講演集)』(日本キリスト教団出版局、2015 年)、“The Prohibition of Suicide for Affirmation of Human Beings by Augustine” in *Scrinium: Journal of Patrology and Critical Hagiography*, vol.11 (1), (Leiden: Brill, 2015)、「自殺あるいは安楽死——死を選ぶとは何を選ぶことなのか」『神と生命倫理』(晃洋書房、2016 年)、他。

矢内義顕 (早稲田大学商学学術院教授) : 上智大学中世思想研究所編『中世思想原典集成 10 修道院神学』(監修、平凡社、1997 年)、R・W・サザーン『カンタベリーのアンセルムス——風景の中の肖像』(翻訳、知泉書館、2015 年)、H・キュンク『キリスト教は女性をどう見てきたか——原始教会から現代まで』(翻訳、教文館、2016 年)、他。



画像出典

オリゲネス (左)・アウグスティヌス (中央)

André Thévet, *Les Vrais Portraits Et Vies Des Hommes Illustres*, 1584.

ジャン・クーザン『エヴァ・プリマ・パンドラ』1550 年頃 (右)